
究極の罠—Gin and Sherry and…

mine

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

究極の罠―Gin and Sherry and…

【Nコード】

N1672S

【作者名】

mine

【あらすじ】

「助けて…：お願い！」久々の再会―静かに銃を構えるジンに向けて、少女が取った行動は―「心配するな。俺が…何があっても、俺が…お前を守る…！」明かされるジンの過去に仕掛けられた罠が、人間としての心理を揺らし―信じられないような誤算を生む…

全てが始まる前の、激しい裏の前奏曲が、今静かに幕を開ける―

0 プロローグ

罨だ―そう、分かっていただろうに……

俺は、人間だ。間違いない……それは、確かだ。

―他人より、少々、変に出来てしまっただけで、あくまで人間には
変わりがない。

だから。二度目の失態をやらかした―信じられねえな……こんなワ
ンシーン。

「上手かった……でしょ？」

くっく……笑わせやがる。これが、あの―冷徹な……奴なはずがない。

―見くびっていた。こいつを……俺の前で、罨を仕掛ける―そんな
技術はない……度胸はない……そう思っていた。

「私も……成長したのね。」

今、目の前には――静かに額に銃口を突きつける少女。
――俺は、全く動けない。

そう――ゲームオーバーってわけだ……

1 選択（前書き）

まだまだ、状況を掴める話ではありません（笑）どうか、長い目で
見守ってやって下さい…

1 選択

『どうだ？…あの憎き男を―殺りたくは、ないか？』
~~~~~

「まだ来ねえのか？取引相手は…」

『はい：兄貴。あれから2時間経ちましたけど、全く…』

遅い。遅すぎる。

―もたもたしてたら、ここも…危ねえ。

「仕方ねえ…：取り敢えず退―っ！」

『ど、どうしたんすか？兄貴…』

「…：なんでもねえ。もう少し、そこで待ってろ。」

『は、はあ…』

ガチャ

会いたかったぜえ…

—S h e r r y. .

そんな裏路地で—無防備にして…ずっと、見つからなかったから—  
大丈夫とでも思ったんだろうな…  
甘いんだよ…くっく…

「おい—」

…気絶してる？

「おい—」

「…あ…」

やっぱり—起きていやがった…

「—会いたかったぜ…シェリー…」

「あ…っ！」

パンツ

な…

「誰だ—出て来い。」

「ダメ！逆らっちゃ…敵は5人！」

「何？」

「バーボンと…その、手下！」

「っ！」

何…？

「狙いは私…取り敢えず、説明するから―車に乗せて！」

くそっ…止むを得ねえ、か…

「―ついて来い。」

「ええ…」

後ろから、相変わらず発砲が続いている…まさか、あのバーボンが…？

「兄貴！…その娘、どうしたんすか！？」

「シェリーだ…取り敢えず、さっさと車を出せ。」

「は、はい！」

「―さてと、それじゃあ…説明してもらおうか。」

「ジン…」



次の瞬間―俺は、この…冷徹だったはずの、小娘に―抱きかかえられていた。

「助けて……お願い…力を、貸して…！」

思わず、構えていたライフルを―腕から落とした。

~~~~~

「バーボンに…捉えられた…？」

「ええ……くっ……」

志保の右肩に、ジンに乱暴に傷を治療させられた痕が残っている。

「見つかって…撃たれて、このザマよ…でも、助かったわ…丁度、

あなたが…来て……」

傷痕を押さえ込みながら、話し続ける志保。

「バーボンは、私を生け捕りにして…そのまま、上に報告して、殺すつもりみたい…もし、私が捕らえられたら…」

―あなたの立場も、危ういんじゃないかしら？

「…つまり、お前を助け出せ―と。そう言いたいわけだ。」

「ええ…」といいかけたその時―ジンの放ったライフル弾が、志保の右こめかみを掠った。

「ちよっ…兄貴！車内でそれは…」

しかし、ウォツカの声も―まるで、ジンには届いていない。

「ふざけるな…俺がお前を殺せばいいだけだ―そうだろう？シエリ！…」

「―そうね…っ…でも、私だってこの数ヶ月、何もしてなかったわけじゃないわ…あなたの為に…赤井秀一が生きている事も、ちゃんと突き止めたんだから…」

「なっ!？」

その一言で、ジンが揺さぶられる。

「―耳寄り情報、他にもたくさんあるけど…どうする？今私を殺せば…その内バーボンに突き止められる事ではある…今消す？それとも…後にする？」

さあ、ジン―選びなさい。

2 判断

『出来た…!』

ようやく、完成した―解毒剤の、新たな試作品。

今度は飲めば1日、そして、効果が切れる直前に飲み込めば―さらに1日、原型を保っていられる。

これが、完全体への足がかりになるはずだ。

ピンポーン…

…誰かしら。博士は留守だし…出るしかないわね…

あ、工藤君だとしたら…これほど都合がいい事も無いわね…

ガチャ

『はい……っ!』

『会いたかったよ…シェリー。』

『っ…』

~~~~~

「どうする？」

腹立たしい。余りにも…

―この女が、俺に向けて、取引を差し出す？

…組織の恐怖に震えて、日々を過ごしていたはずの…この女が…？

―ふざけやがって。

「…どうするんすか？兄貴…」

―聞かなくても考えてるだろうが。黙ってる…と、返したくもなる。

「―信じられねえなあ…お前は知らないだろうが、赤井秀一は…キールが殺ったんだ……」

「けれど―私としては、不思議でならないわね。あなたがあの死に疑問を持たなかった事…このこと現れて、撃たれに来るような人間じゃないはずよ…そう、例えば―あれは、組織の関係者の変装だった…とすれば？」

……

「—だったら、何だ。こっちは監視カメラで、赤井本人である事を確認している…間違うはずねえよ…」

—そうだ。あれは、間違いなく…赤井秀一。

「……ベルモット…」

「？」

「—彼女が居れば、そんなの容易でもな…」

黙れっ！

パンツ

「っ…」

右肩—放っておいても、死ぬような場所じゃないだろうが…

「—ベルモットが裏切った、とでも言いたそうだが……今ので、読

めちまったなあ……」

「え…」

今度は…バーボンの手先になって、俺を欺こうとしているとはな…  
s h e r r y . . .

「…どういう事？」

「バーボンから、課された指示は…俺の信頼を取り入って、上手く騙し…罠に嵌める事―俺に抱きつくなんて…下らない演技までしやがって…」

―冷静に考えれば、その答えに辿り着くのだ。

所詮、こいつの言ってる事は…全て、出任せに過ぎない。

そう、俺を…欺こうとする、愚か者の足搔きに…

「―だったら、試してみる？」

「…？」

「二人…赤井秀一と、裏切り者のCIA、キール…両方とも、ま  
とめて仕留めて見せるわ…そうすれば、信賴して貰えるでしょ？」  
その女は、また不気味な笑みを―俺に向けた。



### 3 策略（前書き）

これを書かないとメインである続編が全く書けない！

### 3 策略

『バーボン…？』

『ああーふふっ…久しぶりだね。シェリー…』

すつと、灰原は目を逸らす。

『ー何しにきたのよ。今更…』

『酷いなあ…一応ー』

『ーそれ以上言ったら、警察呼ぶわよ？「詐欺者がやってきた」って…手短に、用件だけ話して。』

今度は、鋭い目つきで灰原が睨んだ。

『悪かったよ……ー用件ってのはだ……』

~~~~~

「……今すぐにも、二人は殺れるわ…ジン、キールの連絡先は分かるでしょ？」

「…だったら、何だ。」

「―教えて。私が連絡すれば…あっちも、誘いに乗ってくるはず…後は、彼女に赤井秀一を呼んでもらえば…そうね。彼が死んだ場所…来葉峠なんかどうかしら？」

―ずっと、不気味な笑みをジンに向けている。

まるで、立場が逆転したかのよう。

明らかに、志保が屈する立場にある物を―全てを引っ繰り返したかのように…

だが、何もせずに黙っているジンでは無かった。

「―面白い。殺って見せろ…ただし、バーボンも―だ。」

「……………」

志保が、初めて黙った。

「—どうした？何を躊躇う？—お前は組織に戻る事が出来るという、信じられないような特権を得かけているのに……それを、まとめて—」

「—いいわ。」

ジンは最後まで言い切ったが、志保が先に強く叫んだ。

「—バーボンだけ、別でいいならば…：勿論、スナイパーはあなたの選択で。おびき出すのは任せて頂戴。」

—暫くの沈黙を破ったのは、ジンがライフルを収める音だった。

ふっと、志保が笑顔を作る。

「信用してくれるなんて…珍しいものね。」

それでも、その笑顔は―正に、「シェリー」の物。
断じて、「宮野志保」…まして、「灰原哀」の物であるわけが無い。

「―気が変わった。もう一度…この目で見て、殺してやるのさ……
奴をな…」

―もしも、彼に誤算があるとすれば、それは赤井への、異常なまでの執着心…そして、陰に潜んだ…彼の記憶。

それが、呼び覚まされてしまおうとしている事―他は、完璧だった。

~~~~~

『―あなた、本気?』

思わず、灰原が笑ってしまった―嘲笑。

『本気も、本気さ:』

にやついた顔で、屈んで言うその男。

『一つ言っておくけど:あなたの思ってるほど、ジンは―楽には死なないと思うけど?』

麻醉銃で撃たれた部分を、自らの拳銃で撃ち抜く事までも行う男―言うならば、痛みとか死への恐怖を感じない、化け物。

それに、そんな事ならば―わざわざ志保に頼みに来る理由はない。適当な部下でも使ってやればいいだろう。

『それは、元より承知の上での案さ……—ところで、お前……両親の死因、知ってるか？』

『……交通事故よ。』

「下らない話を思い出させないで」と言いたかったが、その前にバ—ボンが続けた。

『—違うな。事故じゃない……組織の人間を恨む者による、連続轢き逃げ殺人—しかも、犯人が捕まっていない、な……』  
『っ！』

『そして……犯人は—当時20歳…初めて乗った車で、妹を連れてドライブへ向かったのに、新開発のエンジンの故障で事故……男は軽傷ながら、妹は未だに意識不明—その新開発のエンジンを、実験過程で作りに出した、天才科学者『宮野厚司』と『宮野エレナ』、その他開発に関わった全ての人間を轢き逃げしたのが……』

—ジンだった……ってわけだ。

突き付けられた真実は――思いもしない形だった。



## 4 憎悪

『嘘……』

そんな……こんな、事って…

―それじゃあ、私の家族を…全員殺したのは…

『ジンが…?』

『―さて、そこで提案だ……シェリー。』

……え？

『お前はジンが今、憎い……殺したい程に―そうだろう?』  
っ！

『図星、かな？』

……

『別に憎んじやないわよ……もうどうしようもないんだから……』

そう私が言うと、バーボンは大きく息を吐き出す……

―むしろ、腹立たしくて溜め息をつきたいのは私なんだけど……

『本当に？』

『ええ。本当に……それとも、私が嘘をつくとも？』

ポリポリと頭を掻く彼。

―緊張した空気の微塵も感じられない。

『それじゃあ…仕方ないかなあ。』  
『……』

そうして、彼は扉を閉め—ようとした。

—その一瞬の油断が、失策だった。

次の瞬間、素早く扉をすり抜けた彼は—

~~~~~

「—あら、ジン……どうかしたの？」

ビルの中に響き渡る、独特なコツ、コツという足音。

「あなた自らこっちに出向いてくるなんて……あの時以来かしら？」
「—伝言だ……読んどけ。」

ジンは手紙をキールへと投げつける。

「……シェリー？」

「ああ…」

―勿論、キールにも聞き覚えはあった。

「確か…組織を裏切ったって言う…」

だが、ジンは訂正した。

「―裏切ったんじゃないえ…復帰したんだ。」

「え？」

「奴は、長い事警察に目を付けられていたからな…この前、特殊な連絡方法を使って復帰した。」

―ジンは、ただ会っただけである。

「…そう。それで…彼女が、私に個別に用があるってわけね…」

「―ああ、そうだ。」

―個別なわけが無い。

キールも、何処か歯切れの悪いジンに、何かしらの違和感を感じていた。

―だが、その違和感の正体は全く分からない。

「…分かったわ。」

逆らえば、ここで死ぬ。

罠だとしても、そこで死ぬ。

―その立場が、キールの判断を焦らせた。

（バレたのかしら……工作が…）

きゅっと、唇を噛み締め、手紙を握り締めて、キールはその場を立ち去った。

~~~~~

―男は、静かに灰原から唇を離した。

『ふふっ…やっど、捕まえた。』

灰原の目は虚ろで、まさに「灰色」という言葉がピッタリだった。

『あ…』

『ほら―おいで…殺ろう？ ジンを…』

『…う、ん…』

静かに頷いて、灰原は男と手を繋いだ。

『絶対に――二人で幸せに暮らすんだ…必ず…』



## 5 守護

それは、俺がコードネームを与えられる10日前の事であった。

『―テスト?』

『ああ…ドライブテクには自信があるだろう?』

『ええ…』

その男は、俺に向けて、新しいエンジンを試してもらう為に―1ヶ月車を貸してくれるという。

『相当画期的な物らしくてね…』

―勿論、作っていたわけではないので、何が画期的なのかは知らないらしい。

『そうですか…安全テストは済んでるんですよね?』

『ああ。後は試運転だけ…』といっても、激しく動かしてもらわなくちゃ困る…としたら、君に色々やっておいて貰いたいんだが…任せてもいいかね?』

少し悩んだが、殆ど間髪を入れずに、即答した。

『―はい。構いません。』

―悲劇は、もう目の前に迫っていた。

〃  
〃  
〃  
〃  
〃  
〃  
〃

「―待たせたわね。キール…」

予定の時刻から、1分程度経って、駐車場に「シェリー」はやって来た。

―赤みがかった茶髪で、背は少し私より高いくらい。

「いいえ…私もさっき来た所よ。それより…」

「―用件ね。分かってるわ…でも、こんな所で話すのもなんでしょう？車に乗って…」

不自然に一台だけ停めてあった車のドアを開き、シェリーが乗り込んだ。

―普通に、私は助手席に乗り込む。

「さてと……待ってる人もいるし、少し飛ばすわよ。」

「え、ええ…構わないけど。」

「ここから…そうね。来葉峠まで……」

~~~~~

「APT X 4 8 6 9 の、製作者!？」

いつもは冷静なキールも、流石に大声を上げた。

「ええ…何か、問題でも？」

「でも…まだ、あなた18でしょう？」

「そうよ…そろそろ、19だけど…」

落ち着いた様子で、志保は言う。

「……証拠が残らない、毒薬…よね？」

「…そういう事になるかしら。」

―不思議でしよがなかった。

普通に大学に行くような年齢の女性が―そんな毒薬を作っている事が。

この女性からすれば、私なんて至って普通の人間―キールはそう思えた。

「ねえ……」

「え？」

「―家族は？ご両親はいないの？」

~~~~~

『何だよ！えらそうにしゃがって！』  
『そういうのがむかつくんだよ……っ！』

体中に痣が出来ている。

『しつけーし、暗いし……』  
『お前なんか死んじまえ!』

ーでも、慣れっこだ。

こんな虐め…毎日受けている内に、慣れちゃった。

『ー止めろ。』

『あ!?!』

えっ…

『ーそれ以上手を出すな。』

『何だ…テメェ! この女の味ーわっ!』

きゃっ…

『ちよっ…大丈夫か!?!』

『くそっ……かかれ! 全員でぶっ潰せ!』

『―大丈夫か……?』

『う、うん……ありがと、お兄ちゃん。』

―でも、毎日のように助けられちゃう……私。

頼りっぱなしなんだなあ…

『ったく…しっかりしろ。お前ももう15だ…自分の身ぐらい、自分で守れ。』

でも、助けてくれるお兄ちゃんが―ちょっと、嬉しい。

『ごめんなさい…』

『わ、分かってるなら…それでいい。』

いつも、このやり取り。

―じゃ、つまらないよね。

『でも…』

『え…？』

『守って…くれるんでしょ？』

―お兄ちゃんが、大好きで…一緒にいれば、何も怖くないから。  
ちょっと格好つけて、聞いてみる。



『…ああ。』

…怒ってる？

『あ、お兄ちゃ、ん……変な事言っ……ごめー』  
『心配するな。』

え…

『—心配するな。俺が…何があっても、俺が…お前を守る…！』

……っ…

『…ありがとう。』

—恥ずかしいけど、凄く嬉しい。

## 6 魔弾

『へー……そんなに凄いの?』

妹は興味津々だった。まるで、新しい車を買ったかのように……

『つたく……1ヶ月返すんだぞ?』

『えーっ? そうなの?』

いや……そんな目で見られても……

―まあ、確かに綺麗な車体だ。  
これに強力エンジンだから……サンプルでいいから、俺も欲しいものだ。

『とりあえずーデパートにでも行くか……そうだ。お前、欲しいバツグがあるって言ってたな?』

その問いに、敏感に反応した。

『うん……』

だから、その目で見るなって……

『まあ、買ってやるよ。』

『本当！？ありがとう！お兄ちゃん！』

ハードになって……最近、こいつとろくに顔も合わせて無かったからな……

相当、嬉しいのかもしれない。

―いや、嬉しいのだろう。

『それじゃ、行くぞ…さっさと用意しろ。』  
『うん！』

~~~~~

「死んだわ。皆…」
「えっ…」

「私が幼い頃に、両親は何者かに轢き逃げされ、去年姉は何者かに射殺されて…他界したわ。」

「…そう。」

両親は交通事故で、姉は…何者かの手によって射殺された、この少女。

—どれだけの孤独を、この組織の中で…味わってきた？

普通の人間が、想像できないほどの孤独を…味わってきたのだろう。

「……この組織。」

「え？」

彼女は、いきなり話題を切り替えた。

「どう思う？そもそも、何の為に作られたと思う？」

「…それ、は…」

「あまり、考えた事は無い。」

ただ…

「—とんでもない、ゲームを…作る為？」

「—惜しいわね。いい線いってる…」

惜しい…？

「—全てを、一から…作り変える為よ。」

「え？」

けれど、それは—むしろ、彼女からの最後のご褒美だったのかもしれない。

れない。

―そう思わせるほどに、簡単に私の頭部を銃弾が貫いた。

7 銃声

『うわゝ…凄い座り心地いいね!』

『エアコンがちゃんと効いてる! 涼しいゝ…』

『中也綺麗だね!』

―さっきからこの3つを、ローテーションで繰り返してるから、おかしい物だ。

『ったく…』

『ねえねえ、もう少し飛ばしてよ!』

あのなあ…

『法定速度超せっていうのか?』

『いいじゃん! ちょっとくらい…』

…まあ、少しぐらいはいいだろうが…

さてと、確かここを右折……

ん?

なっ…

『あれ？ここを右じゃなかった？お兄ちゃ…』

『―降りろ！死ぬぞ！』

くそっ…曲がらないし、スピードも落ちねえ！

『えっ…』

―俺は、あいつを抱えて、車を飛び降りた。

けれど、遅かった。
衝突による――大爆炎は、俺らを包んで……

~~~~~

『どうだった？ 殺り易かった？』  
『スナイパーに殺り易いも糞も無いわよ……とにかく、あんたは任務に集中しな。まだ続いてんだろ？』

隣の、白い布を被せた女性の死体をチラリとシェリーは見た。

(……CIA……ね。)

シェリーは再び、アクセルに足を掛けて、踏み込んだ。

『ええ…取り敢えず、ありがと…キャンティ。』

ピッ…

「ふう…」

小さく、溜息をつく。

「後…少し…」

ハンドルを握り、右へと曲げた―

そして、車を停める。

「待たせたわね…ライ。」

「ああ…久しぶりだな。」

仕留めようとする者と、仕留められる者が―交錯する。

「……しかし、良く戻って来れた物だな…」

「組織に」という主語は要らない。

「そちらこそ―死んだはずなのに、そんな事を探ってただなんて…  
予想外だったわ…」

「死んだと推定された理由」なんて説明は要らない。

「さてと…それより、俺に何の用か…聞かせてもらいたいな。」

―志保の口元が、静かに引き締まった。

「…そうね。」

「……」

銃声が鳴り響いたのは、次の瞬間――

## 8 抹消

「…良く避けたわね。」

右手に握っていた拳銃を叩き落とされながらも、志保は冷静に呟いた。

―赤井に残った傷痕は、足に残った小さな物。僅かに、血液が滴っている。

「…いくらなんでも、不穏すぎたんでな。かと言ってお前にキールの時と同じ手が通用するとは思えん。」

「そう…ま、合格点って所かしら？」

（流石に、もう何も持っていないな。）「さてと…用事は済んだか？」

拳銃を拾い上げ、自らのポケットに仕舞った赤井はゆっくりと自分の車へと戻る。

「…残念ね。」

「ん？」

志保は、赤井が車に乗ったのを確認して、逆向きに歩き始めた。

「もうあなたと、二度と会えないなんて。」

―爆発音が、来葉峠に木霊した。

~~~~~

『おい、シェリー！どういう事だい！』

「どうもこうも…こうするしか無かったでしょ？今の彼にはあんた達じゃ当てられないわ…」

『クツ…黙—ちよ、ジン！』

キャンティから、ジンが通信機を取り上げた。

『おい、シェリー。これじゃ前と同じ…何かしら証拠は用意出来たんだろうな？』

「当たり前じゃない。外したわけじゃないんだから…右足部分の血液で大丈夫でしょ？貴方達なら鑑定できるはずよ…さっさと持ってくから、確かめて頂戴。」

ジンは、静かに笑った。
「フン…ご苦労だった。シェリー。」

ピッ…

9 死神（前書き）

一応最終回。

9 死神

「…どうだった？」

個室に閉じ込められていた志保の元に、ジンが戻ってくる。

「…信じられんな。」

「え？」

―それでも、確かにジンは笑っていた。

「本人だ…バーボンが食いついてこなかった理由が、とても信じられねえ…くっく…」

「……そう。」

そして、すぐに部屋を出て行く。

「フン…もう二度と、変な気を起こさない事だな。」

「ねえ。」

志保は、小さく笑った。

「…私の同じくらいの、女性…見なかった？」
「あ？」

さらに志保は付け加える。

「…この施設の、管理者…誰だったかしら？」
「…何を。あの方…なっ！」

次の瞬間、ドアが勝手に閉まる。

「くそっ…っ！」

—遅かった。気付くのが。

「…捕まえた。」

捉えてあつたはずの少女が、確かにそこには居た。

パ
ア
ン

「ぐあ…」

―死の間際、確かにジンが視界に捉えたのは…変装を解く、少女の姿。

「…く…っ…」

たった一人の死んだはずの妹が、確かにそこに居た。

~~~~~

早く…早く…!

「くっ…」

いつ? 一体、いつ眠らされたの?  
私…何時から…

「バーボン…!」

彼の行き先は、あそこしかない。残されたメモ…ジンの筆跡。きっと、あそこで…ジンに…

「……早く…!」

もう遅い。絶対遅い…けれど…!  
このままじゃ、殺られる…確実に!

「はあ、はあ…」

ここ…！

そう、このビル…

「…早く、しないと…」

『ガチャ』

「バーボ…！！」

遅……かつ—

「お待ちしておりました…シェリー様。」

そう…ふふっ…

—ようやく、始まったのね。全てが…



## 9 死神（後書き）

さて、含みあり…どころじゃない結末になりました（笑）

とりあえず、この小説が全ての始まりと思ってくれて構いません。  
実は、この続編が例のあれだったりして…おっと、ネタバレになりますな（笑）

またしばらく放置になってしまいましたが、どうかよろしくお願いします  
ます m ( ) m

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1672s/>

---

究極の罌—Gin and Sherry and…

2011年10月8日07時15分発行